

特集

共に生きる新しい「学びの共同体」づくり ～沖縄の実践から～

昨年度から始まった沖縄大学の寄附講座、そして今年度は沖縄国際大学でも寄附講座を開講し、来年は複数の大学でワーカーズコープの寄附講座が始まる予定である。寄附講座開講にあたり、沖縄大学の関係者、沖縄国際大学の関係者の皆様に感謝を申しあげたい。

協同の発見誌277号(2015年12月号)で「沖縄を知る、沖縄から学ぶワーカーズコープ」を特集テーマに据えている。277号は寄附講座を初めて開催したこともあり、沖縄大学の講座を特集の中心テーマにしているが、本号は沖縄大学、沖縄国際大学の講座の様子とともに、辺野古・高江への関わりなど、この1年でワーカーズコープが沖縄の現状から学びながら沖縄で何をしてきたのか、全国や沖縄でどう行動するのかを少しでも考えるものにしたという意図を持って特集を組んだ。

「共に生きる新しい学びの共同体づくり」を特集テーマに設定したのは、「学びの共同体」を地域でつくるのが、人と人をつなげ、現実の社会的困難を解決する可能性をもちうるものになると考えたからである。そして「共に生きる」とタイトルにつけた意味として、「働くこと」「暮らすこと」「地域が存在し続けること」などは生きることであり、生きる上で「共に(Co.)」歩むことの大切さが特集の各報告で述べられているからである。そして「新しい」とあえてつけたのは、新しい働き方である「協同労働」が、共に生きるために最大の焦点になるだろうと確信しているからである。

協同労働で働く人の学び、協同労働に初めて触れた学生の学び、そしてワーカーズコープの寄附講座を開講していただいた研究者の視点からの学びから、「協同労働」が、「働くこと」「自治」「地域づくり」「仕事おこし」において住民が主体者となる意味で、社会を変えられる1つの光を持つものであると考えている。そのような意味で本号は、277号とともに、285号(2016.8月号)「若者の労働観と協同労働に触れて」とも「協同労働の学び」という視点で深いつながりがある号となっている。

沖縄大学の寄附講座の2年目の到達点等について、島袋隆志准教授にご寄稿いただいた。座学だけではなく、現場実習をカリキュラムに入れた今回の寄附講座は、学生にとって「障がい者」として障がい児を見るのではなく、「一人の子ども」として関わる中で、学生が真に「分かる」ことを実習から学んだ。また人と地域と事業をつなぐことができる人材を育てる仕組みとして、ワーカーズコープの働き方を提案したいという提起を島袋先生からい

ただいた。

沖縄国際大学では今年度初めて寄附講座を開催し、学生自身が「働くこと」「沖縄の貧困の現状」「地域の課題を考えること」を学生が講義を通して学び、「協同労働の協同組合」と出会い、自らの生き方を考える場になった。また村上了太教授は「沖縄の社会的課題の解決とキャリア教育の展開」をテーマに、沖縄の失業の実態とともに、共同売店、英国の社会的企業の状況をもとに、大学のキャリア教育のあり方と協同労働を重ねあわせながら寄稿いただいた。

飯沼潤子さんには、なかなか在京の大手マスコミでは伝えられない現実の沖縄の米軍基地反対に関わる辺野古・高江の現状をルポとして、まとめていただいた。本稿でも紹介している山城博治さんが逮捕されるなど、壮絶な状況下で、私たちはこの運動を通して多くの気付きと学びを得ることになっている。本土に住んでいる人は本土に住んでいるからといって、沖縄のことは関係がないということではなく、沖縄の現状が今の日本社会全体で起きている縮図であり、そこから真摯に学ぶことが、未来の日本の社会をつくる上で、市民による社会づくりにしきれないかどうかの分水嶺になるのではと感じている。

また本号では「沖縄の自己決定権」という本を紹介している。自己決定権をすることの価値を沖縄の歴史や現実から学ぶものになっていると感じている。読者の皆さんには是非、本著を手にとっていただければと思っている。

沖縄国際大学は2004年に大学構内に在日米軍基地のヘリコプターが落ちた歴史がある。村上了太教授から、墜落により被害を受けたキャンパスが今、どのようになっているのかを写真で送っていただいた。その歴史を持つ貴大学は「自由と平和」を建学の精神を持っており、ここでワークスコープ論を開催したことに意義の深さを感じる。「学びの共同体」として、「自立」と「協同」にもとづく「自治」のあり方を、学生自身が感じる、学ぶことが、未来の日本の社会を変える原動力になることを確信している。

相良 孝雄(協同総合研究所)



墜落により被害を受けたアカギ



ヘリコプターにより
傷がついた校舎



ヘリコプター墜落のあと、
保存されている構造物